

視覚障害者の「困難」知って

放送大学院2年の金山佐保さん(45) 甲府市は、県内に暮らす視覚障害者を取り巻く課題に関する研究をしている。課題を掘り起こして解決の一助につなげようと、当事者の「声」を集める調査をした。都市部と比べて公共交通の発達が進んでいない山梨で、約9割が「移動」に関する支援を望んでいることが分かった。今後、論文にまとめ、学会で発表する予定で「交通空白の存在は視覚障害者にとって影響が大きい。当事者が抱える思いを発信していきたい」と話す。

〈小池直輝〉

移動支援望む声強く

大阪府出身の金山さんは小中学校時代、障害のある友人がいたことから、障害者支援に関心を持つようになった。大学では障害児教育を専門に学び、府内の支援学校や療育センターで勤務した後、夫の転勤をきっかけに30歳ごろに山梨に移り住んだ。

県内では、甲府市にある障害者支援施設「青い鳥成人寮」に勤務している。「本人の気持ちを中心に寄り添った対応」を心がけながら、日常支援のほか、白杖を使ったり歩行訓練や点字訓練などを担っている。

「仕事に関わる学びを続けていきたい」との思いから2025年度、放送大学院に入った。視覚障害者が抱える困難を多くの人に知ってもらおうと考え、研究を進めることにした。

「関心も高い」と分析する。「移動への支援がないと日常の買い物をするのが難しい人も多くいる」と話す。

調査ではこのほか、視覚障害者が支援に関して情報の不足を感じていることなどが見えてきたという。今後、調査で集めた20人の思いを論文としてまとめ、学会での発表も予定している。「調査に協力してくれた人は皆、熱を込めて訴えていた。障害の有無にかかわらず、全ての人が暮らしやすい地域になるために調査結果を生かしていきたい」と話している。



県内の視覚障害者が抱える課題について調査結果をまとめた金山佐保さん
甲府市内

25年9～11月には、身体障害者手帳(視覚障害)を持つ40代以上の当事者20人を調査した。日常生活を送る上で必要な支援について尋ねた設問(自由回答)には、19人が移動に関する内容を寄せた。

具体的には「ふたのない用水路に落ちる」「点字ブロックの整備」など道路環境の課題を挙げていた。「公共交通機関や「タクシー利用の補助」、外出時に支援者が付き添ってサポートする「同行援護」の充実を求める意見もあった。

金山さんは「車を運転できない人が多く、移動に関する影響は一般の人よりも大きく